

来月のイベント 弘大生が準備

フランス文化を身近に

弘前市土手町の蓬菜広場などで9月21〜27日に開かれるイベント「弘前×フランス」週間に向け、弘前大文学部の学生が準備を進めている。同市は、フランス・ブルターニュ地方などが名産として知られるりんご酒「シードル」の日本国内有数の産地でもあり、フランスとの関わりも深い。企画する学生グループ「弘前グローバル・アクション」代表の同大3年、鈴木美世さん(20)は「フランスの文化を身近に感じてほしい」と話している。

【石灘早紀】

「ここは、日本で初めてのシードルを生産した場所です」。7月12日、弘前市吉野町の「吉井酒造」倉庫。同市の旅行会社「びすけ」の西谷雷佐さんの説明に、学生8人が聴き入っていた。レンガ造

から逃れるために建物の中を通る「通り抜け文化」があることや、土手町にある県内初のスクランブル交差点などが紹介され、学生は熱心にメモを取る。「フランス料理の街・弘前。シードルや和菓子もあります。さまざまなお目線で巡ってみるのも楽しいです」。西谷さんはそう語りかけた。弘前大は昨年度、フランス語を通して地域活性化を目指す「弘前×フランス」プロジェクト(代表・熊野真規子准教授)を開始。学生が月1回のペースで、フランス発祥の球技ペタンクを留学生と楽しむイベントなどを開催してきた。今年2月には実際にフランスを訪れ、弘前の文化を紹介するなどの交流も深めた。今年度からは、プロジェクトが「授業」になり、9月の「フランス週間」開催に向け、履修する2〜3年生12人が取材や企画、補助金申請などを行っている。7月12日の町歩きの後も、学生らは蓬菜広場を訪れ、ブーアの配置などを検討。「水飲み場など、広場にあるものを生かしましょう。人も動きを考えて」。熊野准教授の言葉に、学生は耳を傾けていた。

「この日は学生自身が地域についての理解を深めるため、西谷さんを招いて町歩きを行った。弘前の魅力を知り、それをイベントで発信するのが狙いだ。厳冬の雪や寒さの倉庫は、2006年に同市出身の画家・彫刻家、奈良美智さんの展覧会が開かれ、大勢の来場客でにぎわった場所だ。西谷さんは続けた。「当時の社長が(戦後に)フランスにも行って、シードル作りを学びました」。この日は学生自身が地域についての理解を深めるため、西谷さんを招いて町歩きを行った。弘前の魅力を知り、それをイベントで発信するのが狙いだ。厳冬の雪や寒さ

「フランス週間期間中は、仏南西部ポルドー地方の特産品などを蓬菜広場で紹介。9月26日にはフランス風マルシェ(青空市場)開催や「弘前×りんご×フランス」のトークセッションもある。実行委員長の小田切雅熙さん(21)「同大3年」は「フランスを知ってもらうだけでなく、地元弘前の魅力もまんべんなく伝えたい」と話している。



西谷雷佐さん(右)の案内で、弘前市について学ぶ学生ら。奥の建物は日本で初めてシードルを生産したという「吉井酒造」の倉庫―弘前市吉野町の吉野町緑地公園で